

## 米国大統領選 11

### 第二回討論会はオバマ大統領の勝利、再選へ少し前進するも大接戦が続く見通し

11月6日の米大統領選に向けた第2回討論会が10月16日夜（現地時間）にニューヨーク州ヘンブステッドのホフストラ大学で行われた。今回はオバマ大統領が惨敗を喫した初回とは様変わりして攻撃的な姿勢を貫き、ロムニー候補に対して勝利した。今回の討論会前の選挙戦は、初回で圧勝したロムニー候補に弾みがつき情勢は大接戦となっていたが、オバマ大統領の勝利でロムニー候補のモメンタムは止まる可能性が高い。もっとも、ロムニー候補も惜敗であって、初回の圧勝で得た好感度、大統領を担いうる人物という有権者の評価は崩れていない。本日以降、オバマ大統領の支持率は緩やかに上昇するだろうが、その幅は初回討論会で失った分の一部であろう。あと20日を残すのみとなった選挙戦は、投票日まで大接戦が続く可能性が高い。ただ、選挙の勝敗を決める獲得選挙人数の見通しでは、今回の討論会の結果、オバマ大統領が現在の小幅のリードを守り切り、再選される可能性が少し高くなったと考える。

#### 1. 討論会総評：オバマ大統領が終始攻撃的な姿勢を貫き、手堅く勝利

オバマ大統領は初回討論会で熱意を欠いた発言が目立ち惨敗を喫したが、第2回討論会はずっかりと形勢を立て直した。初回の準備不足の反省もあってか、今回は事前に3泊4日の「緊急合宿」を行うなど準備は十分だった様子であり、前回の無気力とも批判された発言と姿勢は消え、今回は最初から最後まで攻撃的であり、熱意を込めた発言が目立った。

逆にロムニー候補は初回の独演会のような優れた表現能力を一方向的に披露する機会が今回は僅かしかなかった。大きな原因の一つはオバマ大統領から攻撃を受け続けたこと、もう一つは司会者の能動的な運営である。今回の司会者を務めたCNNの経験豊富な女性政治記者であるキャンディ・クローリー氏は、オバマ・ロムニー両候補に対して時間超過の発言を許さず、質問への回答をはぐらかした候補に対しては追加質問をするなどして議論の脱線を防いだ。クローリー氏は両候補にバランスの取れた運営をしたが、初回はロムニー候補が司会から主導権を奪って独演会に持ち込んだこともあり、相対的にロムニー候補の方が前回よりも発言を制されることになった。

このように初回とは逆になった両候補の勢いの差が大きく、それだけでオバマ大統領が討論を制した感がある。実際、討論後の「どちらの候補が討論に勝ったか」を問う緊急世論調査では、オバマ大統領の勝利との結果が出た。ただし、第1回のロムニー候補の圧勝ほどの大差はなく、CNN調査のオバマ大統領46%対ロムニー候補39%、CBSニュース調査はオバマ大統領37%対ロムニー候補30%が示すように、オバマ大統領には手堅い勝利、ロムニー候補にとっては惜敗だった。他のコロラド州やカリフォルニア州など地域限定の世論調査でも、同様の結果が出ている。実際に討論を最初から最後まで見た筆者の印象としても、この調査結果は納得できる。

#### 2. ロムニー候補の敗因：前回ほどロムニー候補に有利な展開にならず

##### (1) タウンホール・ミーティング形式の進行

今回は、両候補の発言に新味はなかった。初回はロムニー候補が穏健派に突然回帰するという大きな変化をみせたが、今回のロムニー候補は穏健派の立場を強調するにとどまり、その発言も初回の主張の繰り返しが目立った。一方のオバマ大統領も、初回の敗因の一つとされた二期目のビジョンの説明不足は、今回少し改善されるにとどまった。

むしろ両候補とも、今回の投票相手を決めていない有権者からの質問に簡潔に答えるという形式

では、有権者に新たな政策やアイデアを説明しても理解を得ることは難しいと考えて、これまでに発表済みの政策等の説明に徹した様子もあった。ただオバマ大統領は、ロムニー候補の政策の説明に対して初回はあまりなかった攻撃的な質問や批判を数多くしたために、ロムニー候補の保守派から穏健派への主張の回帰や公約と計算の合わない減税策の問題点などが初めて目立つようになった。逆にロムニー候補のオバマ大統領の発言に対する反論等は、初回の繰り返しが多く、インパクトは弱かった。この二つの差がオバマ大統領の方が有効な攻撃をして得点を上げたという印象を強めた。

## (2) ロムニー候補が相対的に不得意な社会問題の登場

今回、論点として、不法移民対策、妊娠中絶、銃規制など社会問題が初めて登場したことも、オバマ大統領に有利、ロムニー候補には不利になった。経済だけがオバマ大統領に対する優位性であるロムニー候補にとっては、初回の経済に議論が集中する展開は願ってもない幸運だった。逆に今回のように経済の議論に割く時間が減り、代わって社会問題の議論が増えると、発言の説得力がどうしても劣ってしまう。しかもロムニー候補は、社会問題に対しては選挙での支持を拡大するために政治的な立場や態度、主張を見境なく変えてきた実績があり、逆にその節操のなさが選挙の対立候補の格好の攻撃対象になり続けてきた実績もある。案の定、今回もロムニー候補の社会問題に関する発言は、経済・雇用に比べれば精彩を欠き、初回のように説得力のある発言を連発して有権者に好印象を与えることはできなかった。一方のオバマ大統領は、経済以上にロムニー候補の発言の矛盾を突きやすかったように見受けられた。

注目された「47%失言」は、先にロムニー候補が100%の代表を目指すと打消しを図ったが、大統領は討論の最後に「47%失言」にも言及した。両候補ともこの取り扱いは慎重であり、今回の討論で直接的に有権者にインパクトを与えたことはなかっただろう。

## (3) ロムニー候補の「リビア大使殺害事件」の追及の失敗

ロムニー候補が不得意とされる外交政策が議論されたことも、同候補に不利になった。会場の質問者が取り上げたテーマ自体は、ロムニー候補が狙いを定めていたリビア領事館襲撃事件であり、同候補に有利に働くかとも思われた。だが、オバマ大統領の非難を始めたロムニー候補は、「大統領がテロ攻撃であったことを認めるまで長い時間（14日間）を要した」と事実と反する発言をして自滅した。実際には、オバマ大統領は駐リビア大使らが殺害された直後に「米国はテロ行為には屈しない」と述べていたため、オバマ大統領だけでなく司会のクローリー氏からもロムニー候補は誤りを指摘され、大統領に反撃の機会を与えてしまった。反転攻勢に出たオバマ大統領は、イラク・アフガニスタンからの撤兵、ウサマ・ビンラディンの殺害など4年間の外交政策の実績をアピール。その上で、リビア領事館襲撃事件の責任は自らにあると認め、この問題を政治的なポイントにしようとしたロムニー候補を批判することで、同候補から攻撃の機会を奪った。逆にロムニー候補は、この事件に関する議論だけで外交が不得意であること、自らの回答原稿を作成する優れた外交ブレーンの不足をそろって露呈した格好であり、外交政策がテーマとなる10月22日の第三回討論会への不安を残した。

## (4) 経済に関わる論争では引き分け

一方、経済政策、雇用、財政赤字など経済運営を主題とする議論では、ロムニー候補が初回の討論の勢いを維持する一方で、オバマ大統領の反論や主張も初回と異なり歯切れがよく、分かりやすかったため、白熱した議論が展開された。ロムニー候補の引き続き説得力のある発言をしたことは、CNNの世論調査において経済運営等では引き続きロムニー候補の方が信頼できるとの評価が多かったことに表れた。ただし、失業率が8%を割ったことは、ロムニー候補の攻勢をやはり弱めていた。同候補は不完全雇用率などに攻撃対象を入れ替えたが、雇用統計の専門家でもない大半の有権者にとっては、「8%台の失業率」に比べれば、はるかに分かりにくく、回りくどい説明に聞こえただろ

う。CNN等の中継に示される有権者の反応も乏しかった。一方、有識者から批判が噴出しているロムニー候補の減税案については、初回はオバマ大統領が攻め切れなかったが、今回は細部を突いて攻め立て、「計算が合わない」との印象を有権者にアピールできたと思われる。このような得点や変化を総合すると、経済に関する議論は引き分けだったと判定してよいと思われる。

### 3. 当面の選挙戦の展望：オバマ大統領の再選の可能性が少し拡大するも予断は許さず

#### (1) 全米単位の支持率では大接戦が続く見通し

今回の討論会がオバマ大統領の勝利とはいえ、第一回のロムニー候補の圧勝に比べれば差が小さい分、有権者に与えるインパクトははるかに小さい。しかし、ロムニー候補が初回で得たモメンタムは今回のオバマ大統領の勝利により、今後続かなくなる一方、オバマ大統領の支持率は限定的だが上向くだろう。実際の選挙戦に視点を移すと、今回の討論会の直前時点では、全米単位の世論調査の平均でみればロムニー候補の支持率向上が止まりつつあり、両候補の差は僅少の大接戦となっていた。この後に上記のモメンタムの変化を反映させると、オバマ大統領が支持率でわずかに巻き返すという展開であろう。

図表 1 オバマ大統領とロムニー候補の支持率の推移（％，主要世論調査平均）



(資料)Real Clear Politics.

緊急世論調査の結果を見るかぎり、ロムニー候補は第一回で上昇した好感度を保ち、経済運営、財政赤字、雇用などではオバマ大統領を上回る期待を得ている。同候補のリビア領事館襲撃事件の討論での失敗も、有権者には大きなダメージには見えなかった模様である、そうすると初回で惨敗したオバマ大統領ほどにロムニー候補がこれから支持を失う展開は考えにくい。やはり、上記のモメンタムの変化だけが支持率に多少影響する程度と考えることが妥当だろう。

なお、継続世論調査は、足元で調査機関ごとに結果の乖離が大きくなっている。例えばギャラップ社の調査（10月10-16日、投票予定有権者（LV）対象）ではロムニー候補の支持率が51%に達してオバマ大統領に対するリードが6%ポイントに広がる一方、インベスター・ビジネス・デイリー社の調査（10月11-16日、LV）は逆にオバマ大統領の支持率が47%で2%ポイントのリードである。こうした乖離の背景には、今回の情勢が人種、年齢、性別、地域ごとの両候補に対する支持の差が非常に大きいことがあり、調査対象の有権者の構成、調査方法に占める携帯電話の割合などによって同期間の調査でも大きな差が生じやすくなっているとの指摘もある。個々の調査に頼る危険性は従来以上に増している可能性が高いわけであり、リスクを小さくするにはできるだけ多くの調査から平均的な傾向を読み取るしかない。そうすると、選挙戦の現状はやはり大接戦になる。

#### (2) 選挙人獲得予想ではオバマ大統領が小幅の優勢

もっとも、上記のモメンタムの停止という小さな変化は、一般投票の結果を決める選挙人獲得数

では、ロムニー候補に大きなコストになる可能性が高まっている。同候補は第一回討論会の前にオバマ大統領がリードしていた接戦州のうち、ノースカロライナ州（選挙人数 15 人）、フロリダ州（29 人）、コロラド州（9 人）で同討論会後に逆転に成功し、バージニア州（13 人）とニューハンプシャー州（4 人）で僅差に迫り、ウィスコンシン州（10 人）、オハイオ州（18 人）、アイオワ州（6 人）での差も詰めていた。リアル・クリア・ポリティクス社（RCP）の評価によれば、10 月 17 日時点の選挙人獲得予想は過半数 270 人に対して、オバマ大統領が 201 人、ロムニー候補が 191 人、接戦州が 146 人になっている。今回の討論会でもロムニー候補が勝つか引き分けに持ち込んでいけば、同候補のモメンタムが止まらず、今週末あたりには接戦州の大半がロムニー候補の優勢に転じて、選挙人獲得予想でもロムニー候補が初めてオバマ大統領を上回っていた可能性があった。しかし、今回の討論会での敗北はそうした展開に歯止めを掛け、オバマ大統領は選挙人獲得予想での優勢を守る方向への力が働く可能性が高い。

図表 2 接戦州での両候補の支持率の第 1 回討論会前後の変化（%、主要世論調査平均）

	選挙 人数	10/17/2012 現在				10/2/2012 現在				2008
		オバマ	ロムニー	支持率差	評価	支持率差	評価			
コロラド	9	47.3	48.0	ロムニー +0.7	接戦	オバマ +3.1	接戦	オバマ		
フロリダ	29	46.8	49.3	ロムニー +2.5	接戦	オバマ +3.0	接戦	オバマ		
アイオワ	6	48.8	46.5	オバマ +2.3	接戦	オバマ +3.5	接戦	オバマ		
ミシガン	16	48.8	44.4	オバマ +4.4	接戦	オバマ +10.0	優勢	オバマ		
ネバダ	6	49.0	46.0	オバマ +3.0	接戦	オバマ +5.2	接戦	オバマ		
ニューハンプシャー	4	48.3	47.5	オバマ +0.8	接戦	オバマ +6.0	接戦	オバマ		
ノースカロライナ	15	45.3	50.0	ロムニー +4.7	接戦	- +0.0	接戦	オバマ		
オハイオ	18	48.3	46.1	オバマ +2.2	接戦	オバマ +5.5	優勢	オバマ		
ペンシルバニア	20	49.7	44.7	オバマ +5.0	接戦	オバマ +8.0	優勢	オバマ		
バージニア	13	48.4	47.6	オバマ +0.8	接戦	オバマ +3.7	接戦	オバマ		
ウィスコンシン	10	49.8	47.8	オバマ +2.0	接戦	オバマ +6.7	優勢	オバマ		

(注) RCP(Real Clear Politics)の数値と評価。(資料)RCP

しかも来週 22 日の第三回討論会は、今回の討論会でロムニー候補が経験不足と弱さを垣間見せた外交政策がテーマである。得意とした経済政策、雇用創出策で攻勢を強める機会はない。今後、リビア領事館襲撃事件に関してオバマ大統領に不利に働く政権や国務省による情報隠しなどの疑念が強まる展開にでもならないかぎり、ロムニー候補が外交政策でオバマ大統領を攻め立てて、討論会で勝利するという展開は考えにくい。せいぜい、オバマ大統領も有権者にアピールできず、引き分けとなることもあり得るくらいだろう。そうすると、ロムニー候補が今後、攻勢を強めて逆転に持ち込むという展開は考えにくくなる。

### (3) 第三回討論会での波乱の可能性は小さく、注目は 11 月 2 日発表の雇用統計

全米単位の支持率の比較で見れば、残り 3 週間近く大接戦が続く可能性は高いと思われるが、接戦州でロムニー候補が相次いで逆転に持ち込む展開は、第二回討論会を終えた今は考えにくい。今回の討論会の直前よりも現在はロムニー候補の逆転の可能性は低下し、オバマ大統領の再選の可能性が少しだが高まってきたと考えられる。そして討論会を二回終えてみれば、やはり討論会が選挙戦を大きく変えることはあまりないという過去の経験則が、今回も結局は通用する可能性が高まってきたのではないかと。

なお、先週 11 日の副大統領候補の討論会では、バイデン副大統領の勝利という結果の出た世論調査が多い。識者の中には引き分けという評価もあり、討論会自体では直接的な選挙戦への影響は過去と同様にほとんどないだろう。ただ、バイデン副大統領のパフォーマンスは、自信喪失にもなりかけていたオバマ陣営を救い、オバマ大統領自身にも討論会での攻撃的な姿勢を思い出させるヒン

トを与えたとの評価は多い。選挙戦における両候補のモメンタムということで考えれば、先週の副大統領候補の討論会と今回の討論会で、わずかだがオバマ陣営の勢いが形成されつつあるのではないかと我々は考える。

もちろん、その差は僅かであり、ロムニー候補の経済運営と雇用創出への期待がオバマ大統領を上回ったままで、選挙戦が続くことは、オバマ大統領には大きな懸念材料であろう。しかも11月2日、一般投票の4日前には10月の雇用統計が発表される。失業率が再び悪化するなどの結果次第では、ロムニー候補に最終局面で再び勢いがつく可能性がある。やはり今回の討論会を経ても、最後まで目の離せない大接戦が続くという見方もまた変わらないといえる。

以上／上原・今村

我々は初回討論会の10月3日から討論会の速報、それ以外の重要な変化が生じたと我々が判断した場合には、当報告のTwitterでも報告している。下記のURLからご参照いただきたい。

(下記は今回の討論会直後の報告内容)

丸紅ワシントン報告@MWR2008 <http://twitter.com/MWR2008>

丸紅ワシントン報告 @MWR2008 20h

今回はタウンホール・ミーティングという形式、司会者のキャンディ・クローリー氏が両候補の時間超過を厳しく制し、必要とあらば追加質問をするなど能動的に運営したことがオバマ大統領に有利に、ロムニー候補に不利になった印象。

丸紅ワシントン報告 @MWR2008 20h

CNNの緊急世論調査の結果出る。どちらが勝ったか？オバマ46%、ロムニー39%、誤差4-5%。前回のロムニー候補圧勝よりは差が少ないが、オバマ大統領が勝利との判定、大統領が挽回した形に。

丸紅ワシントン報告 @MWR2008 20h

第二回討論会が終了。オバマ大統領は前回と全く異なり、最初から最後まで攻撃的。逆にロムニー候補は前回ほどはプレゼンテーション能力を発揮できず。発言も繰り返しが多い。不法移民、銃規制、中絶など社会的問題も登場。CNN世論調査は集計中、今回はオバマ大統領が優勢か。

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料の提供する情報の利用に関しては、すべて利用者の責任においてご判断ください。当資料に掲載されている情報は、現時点の丸紅米国会社ワシントン事務所長の見解に基づき作成されたものです。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当事務所は情報の正確性あるいは完全性を保証するものではありません。当資料に記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は、出所をご明記ください。